

## 織田作之助『わが町』における罵りの助動詞について

村中 淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

### A Study of Auxiliary Verbs of Cursing in Oda Sakunosuke's Novel "Wagamachi"

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

*Key Words: Osaka Dialect, Novel as Material, Comparison with Rakugo Materials, Third-party Treatment*

#### 要旨

織田作之助の長編小説『わが町』を大阪方言の資料として用い、罵りの助動詞ヨル、ヤガル、クサル、サラス、テケツカル、テコマスの用例を検討した。それを同じ 20 世紀前半の落語資料における罵りの助動詞の状況と比較・考察した。ヨルはいずれの資料においても最も多く出現し、罵りの程度が軽く、多様な話し手が使う傾向にあった。面と向かっては丁寧に話す相手を第三者としてヨルで待遇する例もあった。これも罵りの程度が軽いことと繋がるだろう。ヨルは第三者待遇がほとんどなのに対し、ヤガルとクサルは、対者待遇が多かった。ヤガルとクサルの使い手に関する相補性は『わが町』には見られなかったが、意味的な差は見出せた。

#### 1 はじめに

大阪方言における罵りの助動詞として、ヤガル、クサル、サラス、テケツカルがある。たとえば、次の文はいずれも、太郎が何かとんでもないことをしたと罵る意図を持つ文である。

- ・太郎が、とんでもないことをしヤガッタ。
- ・太郎が、とんでもないことをしクサッタ。
- ・太郎が、とんでもないことをしサラシタ。
- ・太郎が、とんでもないことをしテケツカッタ。

これらの4つの助動詞は、牧村(1979)では「皆同じ意である」「物事を罵倒するときに用いる語」との説明がある。しかし、形式が異なる以上、わずかなりとも使われ方の違いが潜んでいる可能性はあろう。大阪方言における罵りの助動詞としては、このほかにヨルがある。「太

郎が、とんでもないことをしヨッタ」と言えるが、ヨルは、牧村 (1979) によれば「多少軽蔑の意を含んでいる」とのことで、他の4語に比べて、罵りのニュアンスがやや弱いものと思われる。このほか、使用法がやや異なる大阪の罵りの助動詞としてテコマスがある。

これらの罵りの助動詞の使用状況について、20世紀前半における大阪落語の録音文字化資料を用いて調べた(村中 2021, 2022)。本稿では、20世紀前半の小説の大阪方言のセリフを資料として用い、罵りの助動詞の使用状況を調べる。落語資料から得られた結果との比較も行いつつ、それぞれの助動詞の特徴や違いを見出せるかどうか検討する。

## 2 対象と方法

### 2.1 調査項目

罵りの助動詞ヤガル、クサル、サラス、テケツカル、ヨル、テコマス、の6つの形式を対象とし、資料を調査する。いずれも大阪方言における罵りの助動詞・補助動詞である。

ヤガル、クサル、サラス、テケツカル、ヨル、の5語は、話し手以外の動作に接続し、動作主を罵るニュアンスを含む形式である。話し相手の動作に接続した場合を対者待遇、話し相手ではない人物の動作に接続した場合を第三者待遇と呼ぶ。

テコマスは、話し手の動作を表す動詞に接続し、動作の対象に何らかの被害を与える意図を示す機能を持つ形式である。「被害を与える意図」は「罵り」に強いつながりがあると考え、扱うことにする。

### 2.2 資料

織田作之助(1913-1947)の長編小説『わが町』<sup>1</sup>を用いる。織田作之助は、大阪市内中心部の生まれ育ちであり、小説のセリフに現れる大阪方言については定評がある。20世紀前半当時の大阪の実際の人物の話言葉を生々の形で残す資料がほとんどないため、織田作之助の小説のセリフを資料として用いるのは、その時期の大阪方言を知る適当な手段の一つだと考えられる。

同じ『わが町』を用いて別の項目を調べた村中(2020a)から、『わが町』を用いた理由、および『わが町』のストーリーに関する記述を引用すると次の通りである。

短編よりも長編の方が人物一人当たりのセリフが多いことが期待され、人物ごとの傾向を見るのに都合がよいと考えて、長編小説『わが町』を選んだ。

『わが町』は頑固で愚直な働き者の男、佐渡島他吉と周辺の人々を描いた長編小説であり、織田作之助の生育地である大阪中心部のミナミ近辺に設定された架空の町「河童路地」<sup>がたる</sup>境界が舞台で、大阪の下町の生活実態をよく反映していると考えられる。『わが町』には織田作之助の既発表作品「夫婦善哉」や「婚期はずれ」の人物やエピソードが一部はめ込まれているが、それらは「わが町」独自の人物と渾然一体となり、全体が河童路地に生きる人々の大きな物語となっている。(村中 2020a: 12)

『わが町』の登場人物は 50 人を超えるが、セリフが多いのは、主人公の車引きの他吉、他吉の孫娘の君枝、君枝の夫となる次郎、他吉の隣人で売れない落語家のメ団治、である。村中 (2020a) によれば、セリフ数の合計 813 のうち、他吉 216、君枝 174 (大人時代 134、子供時代 40)、次郎 81 (大人時代 74、子供時代 7)、メ団治 78 である。

### 2.3 方法

『わが町』本文を青空文庫からダウンロードし、セリフ部分を Excel でデータベース化し、調査項目を検索・集計する。用例を検討し、人物ごとの状況や文脈なども観察する。

## 3 結果と考察

### 3.1 出現数

『わが町』において、調査対象となる語形が出現した数を、表 1 に示す<sup>2</sup>。

表 1 『わが町』における罵りの助動詞の数

罵りの助動詞	出現数
ヨル	17
ヤガル	8
クサル	5
サラス	4
テケツカル	2
テコマス	2

各語形の出現状況を見ると、ヨルが最も多い。次がヤガル、クサル、サラス、テケツカル、テコマス、と続く。これを、近代の大阪落語の資料と比べてみよう。村中 (2022) のデータから表 2 を示す。これは明治後期から昭和初期にかけて (1903 年から 1938 年にかけて録音・発売) の、大阪落語口演の録音文字化資料によるものである<sup>3</sup>。

表 2 明治・大正・昭和初期の落語作品における罵りの助動詞の数 (村中 (2022) による)

罵りの助動詞	出現数
ヨル	129
ヤガル	65
テケツカル	25
オル	12
クサル	8
テコマス	2
サラス	1

表 1 と表 2 を比べると、ヨルが最も多く、2 番目がヤガルであること、2 位のヤガルは 1 位のヨルの約半数であること、は共通している。違いは、落語の方にテケツカルが比較的多いことである。

### 3.2 用例の検討

表1で出現数の合計が多かったものから順に、すなわち、ヨル、ヤガル、クサル、サラス、テケツカル、テコマス、の順に、用例を検討する。セリフ内の当該部分に下線を付す。セリフの後ろのカッコ内は、(岩波文庫における該当ページ、話者→聞き手、罵りの対象)である。独り言の場合は、「→聞き手」がない。聞き手と罵りの対象が同一である場合、すなわち対者待遇の場合は、「話者→聞き手」として、聞き手に太い下線を引き、罵りの対象を略した。小説の中で1組のカギカッコに括られたものを、ひとまとまりのセリフの例として挙げた。すなわち1つのセリフの例は、必ずしも1文ではない。語形ごとに用例を挙げているが、別の語形の出現する用例が、すでに挙げた他の語形の用例と重なる場合がある。その場合、同一の用例であっても、別の番号を振っている(例えば(14)と(27)は同一内容)。これは語形ごとに全ての用例を順に並べて挙げることを優先したためである。

#### 3.2.1 ヨル (17件)

ヨルが現れたセリフは次の通りである。セリフ数は13だが、(11)には4件、(13)には2件、他は1件ずつ出現するので、合計17件のヨルが見られた。以下、小説における出現順に並べる。

(出典のルビの代わりに漢語の直後に《 》で読みを記した。)

- (1) ——ところで、皆どこィ行きよつてんやろ。影も形も見えんがな  
(18頁, 他吉→メ団治, 周囲の住人)
- (2) さあ、わいには異存はないけど、新太郎の奴がどない言いよりまっしゃるか  
(24頁, 桶屋主人→他吉, 新太郎)
- (3) なんじゃらと、巧いこと言いよつて……。そないべんちやら(お世辞) せんでも、他あやん喧嘩したこと黙ってたるわいな  
(33頁, 次郎→他吉)
- (4) へえ。娘の婿めが、あんた、マニラでころっと逝きよりましてな  
(45頁, 他吉→車の客, 婿)
- (5) 嘘言うもんか。おまはんも知ってる通り、うちは子供が一人も出けへんし、それにまた、わしもそうやが、うちの家内《おばはん》と来たら、よその子供が抱きとうて、うちに風呂があるのに、わざわざ風呂屋へ行きよるくらい子供が好きやし、まえまえから、養子を貰う肚をきめてたんや。ほかにも心当りないわけやないけど、それよりもやな、気心のよう判ったおまはんの孫を貰たらと、こない思てな。それになんや、その子は両親《ふたおや》ともないさかい、かえって貰ても罪が無うて良えしな  
(50頁, 笹原→他吉, 笹原の妻)
- (6) ——まあ、聴いてやとくれやす。この子のお父つあんも、わいが無理矢理 | 横車《ごりがん》振ってマニライ行かしたばっかりに、ころっと逝ってしまいよりました。この子の

お母んもそれを苦にして、到頭……。言うたら皆わたいの責任だす。もうわたしは自分の命をこの孫にくれてやりまんねん

(52頁, 他吉→笹原夫婦, 婿)

(7) やっぱし校長先生や。良えこと言いよんなあ。人間は何ちゆうても学やなあ

(58頁, 他吉→提灯屋, 校長)

(8) 書きよつたなあ。うーむ。なるほど, よう書いたアる

(62頁, ♪団治 (落語の中の人物のひとりごと, 不明) )

(9) 灸すえたろと思たら, お前, 泣きだしよつたんや

(68頁, 他吉→♪団治, 君枝)

(10) そない言うたかて, お前, まあ, 聴いてくれ, 笹原の小倅も古着屋の子も, みな優等になってんのに, この子はなんにも褒美もろて来よれへんねん。こんな不甲斐性者《がしんたれ》あるやろか

(68頁, 他吉→♪団治, 君枝)

(11) まあどっちでもええ, とにかく, 人間はらくしたらあかん。らくさせる気イやったら, わいはとつくにこの子を笹原へ遣ったアる。しかし, ♪さん, 笹原の小倅みてみイ, やっぱり金持の家でえいように育った子オはあかん。十やそこらで, お前, 日に二十銭も小遣い使いよる言うやないか, こないだ千日前へひとりで活動見に行つて, 冷やし飴五銭のみよつて, 種さんとこの天婦羅十三も食べよつて, 到頭下痢《はらく》になって, 注射うつやら, 竹の皮の黒焼きのますやら, えらい大騒動やったが, あんな子になってみイ, どないもこないも仕様ない。親も親や, ようそんだけ金持たしよるな

(99-100頁, 他吉→♪団治, 笹原の息子) (100頁, 他吉→♪団治, 笹原)

(12) こらまた, えらい大きに伸びたもんやなあ。ほんまに, これ次郎ぼんが引伸したら言うもんしよつたんか。ふうん。ほな, 次郎ぼん, もう一人前の写真屋になつとるんやなあ。一銭渡したか

(165頁, 他吉→君枝, 次郎)

(13) えらい奴ちゃ。人間は身体を責めて働かな嘘や言うこと忘れよらん。あいつはお前, 夕刊配達しとつた時から, 身体を責めて来よつた奴ちゃし, わいがよう言い聴かせといたつたさかいな

(166頁, 他吉→君枝, 次郎)

上記の例文から, 話し手・罵り対象・話し相手と, デスマス体であるかどうかを示したのが表3である。

表3 ヨルの話し手・話し相手・罵り対象とデス・マス体

話し手	罵りの対象	話し相手	デス・マス体	件数	文例番号
他吉	周囲の住人	ㄨ団治		1	(1)
他吉	新太郎 (婿)	車の客	○	1	(4)
他吉	新太郎 (婿)	笹原夫婦	○	1	(6)
他吉	君枝	ㄨ団治		2	(9) (10)
他吉	次郎	君枝		3	(12) (13)
他吉	笹原の息子	ㄨ団治		3	(11)
他吉	笹原	ㄨ団治		1	(11)
他吉	校長	提灯屋		1	(7)
ㄨ団治	不明	なし (独言)		1	(8)
笹原	笹原の妻	他吉		1	(5)
桶屋の主人	新太郎 (桶屋の弟子)	他吉	○	1	(2)
次郎 (子供時代)	他吉	他吉		1	(3)

(3)の1例を除いては、全て第三者待遇である。(3)の例は、次郎という人物の子供時代である。ヨルは基本的には第三者待遇であり、(3)の次郎の使用状況が例外的なのではないかと考えられる。この子供時代の次郎はかなり生意気な態度をとっており、親世代よりも年長の他吉に向かって、「他あやん」と呼びかけ、デス・マスの全くない、くだけた話し方をしている。

ヨルを使っている人物に注目すると、他吉13件、ㄨ団治1、笹原1、桶屋の主人1、次郎(子供時代)1、である。笹原は近所の裕福な家の主人であり、桶屋の主人は、他吉の娘の結婚相手の雇い主である。いずれも大阪の下町の住人であるが、比較的さまざまな属性を持った人物がヨルを使っていると言ってもいいだろう。ただし、女性の人物は使っていなかった。

デス・マス体と共起しているのは、(2)(4)(6)の3例である。(2)のヨルは、桶屋の主人が他吉に向かっていう「まっしゃるか」、(4)のヨルは、他吉が車の客に向かっていう「ましてな」、(6)のヨルは、他吉が笹原の夫婦に向かっていう「ました」、にそれぞれ接続している。丁寧に話す相手への談話の中でヨルを用いても差し支えないということである。

罵りの対象を見ると、おおむね目下のものが対象となっているが、前述した通り、子供時代の次郎が、自分よりもずっと年長の大人である他吉を対象としている。そのほか、他吉が、笹原や校長を対象としているのが注目される。他吉にとって、笹原は、文例(6)を見ても分かる通り、面と向かってはデス・マス体で話す相手である。しかし(11)においては、「親も親や、ようそんだけ金持たしよるな」と言っており、笹原が甘すぎる親であるということを取り上げて、軽く罵っている。対象が校長の場合は、(7)の内容を見ると、「良えこと言いよんなあ。人間は何ちゅうても学やなあ」となっており、その前の地の文を見ても「校長先生の挨拶に他吉はいたく感心し」とあるので、からかっているわけではなく、校長を心から誉めている文脈なのである。罵っているというニュアンスはほとんどない。ではなぜ、ここで他吉は、校長の動作「言う」にヨルをつけたのか。第三者待遇であることを明確に示すのと、軽く親しみを表す意図があるのかと思われる。

### 3.2.2 ヤガル（8件）

ヤガルが現れたセリフは次の通りである。

(14) こらッ。ベンゲット道路には六百人という人間の血が流れてるんやぞォ。うかうかダンスさらしに通りやがって見ィ。自動車のタイヤがパンクするさかい、要心せエよ。帰りがけには、こんなお化けがヒュードロドロと出るさかい、眼エまわすな。いっぺん、頭からガブッと噛んでこましたるか

(16頁, 他吉→米人)

(15) さいな、あんまり現糞《げんくそ》のわるい事言いやがったさかい……

(31頁, 他吉→次郎, 喧嘩の相手)

(16) ようもひとの縄張りを荒しやがったな

(56頁, 車夫→他吉)

(17) さあ、来やがれ!

(56頁, 他吉→車夫)

(18) この子を芸者にするつもりか。何ちゆうことをさらしやがんねん

(85頁, 他吉→オトラ)

(19) 写真, 写真で, 写真がなにが良えのや。次郎ぼんに写真きちがいを仕込まれやがってエ……

(170頁, 他吉→君枝)

(20) ——お前ら寄ってたかって巧いこと言いくさって、到頭マニラへ行けんようにしてしまいやがった。しかし、言うときけど、これは今だけの話やぜ。行ける時が来たら、誰が何ちゆうてもイの一番に飛んで行くさかい、その積りで居ってや

(177頁, 他吉→次郎とヱ団治)

(21) ——どうせマニラも陥落したこっちゃし、マニラへも行くんやろ。うまいことしやがんな

(201頁, 他吉→ヱ団治)

ヤガルの場合、8例中7例が対者待遇であり、対者待遇が多いのが特徴であると言えよう。また、8例中7例の話し手が、主人公の他吉であった。ヱ団治や次郎は使っていない。他吉は、気に入らない相手をいきなり殴りつけたり、「わいはベンゲットの他あやんや」とすごんだりする暴れ者であることから、ヤガルは穏やかでない粗暴なニュアンスがあると思われる。文例を見ても、(14)(16)(17)は相手に喧嘩を売っている場面である。(18)は喧嘩ではないが、相手のオトラに対して、怒り心頭に発している場面である。ただし、(15)(19)(20)(21)は、対象へののがにがしい気持ちを込めつつ、口調は穏やかである。

### 3. 2. 3 クサル (5件)

クサルが現れたセリフは次の通りである。

(22) 取るもんだけは、きちきち取りくさって、この子をそんな目に会わせてけつかったのか  
(57頁, 他吉→君枝, 君枝の里親)

(23) 阿呆らしい、ひとを年寄り扱いにくさって……。去年着られたもんが、今年着られんことがあるかい。暑い言うたかて、大阪の夏はお前マニラの冬や  
(126頁, 他吉→君枝)

(24) ああ、やっぱり親のない娘はあかん。なんぼ、わいが立派に育てたつもりでも、到頭あいつは墮落しくさった  
(163頁, 他吉ひとりごと, 君枝)

(25) 阿呆! いま何時や思てる。もう直きラジオかて済む時間やぜ、若い女だてらちゃらちゃら夜遊びしくさって。わいはお前をそんな不仕鱈な娘に育ててない筈や。朝日軒の娘はんら見てみイ。皆真面目なもんや。女いうもんは少々縁遠ても、あない真面目にならなあかん。今までどこイ行てた?  
(164頁, 他吉→君枝)

(26) ——お前ら寄ってたかって巧いこと言くさって、到頭マニラへ行けんようにしてしまいやがった。しかし、言うとかけど、これは今だけの話やぜ。行ける時が来たら、誰が何ちゅうてもイの一番に飛んで行くさかい、その積りで居ってや  
(177頁, 他吉→次郎とメ団治)

5件とも、他吉のセリフである。話し相手は、君枝、次郎、メ団治のようにごく親しい身内のような相手であるか、もしくは独り言である。クサルの直前につく部分を見ると、クサルがつく以前から罵る気持ちが含まれているように見えるものばかりである。(22)「とるもんだけは、きちきち取り」、(23)「阿呆らしい、ひとを年寄り扱いにし」、(24)「到頭あいつは墮落し」、(25)「若い女だてらちゃらちゃら夜遊びし」、(26)「お前ら寄ってたかって巧いこと言い」、である。罵る気持ちがもともと含まれた文を、より強めるものとしてクサルが付加されるのかも知れない。ということは、クサルそのものには、さほど強いニュアンスは含まれていない可能性がある。その点は、ヤガルの粗暴なニュアンスとは異なるのであろう。

### 3. 2. 4 サラス (4件)

サラスが現れたセリフは次の通りである。

(27) こらッ。ベンゲット道路には六百人という人間の血が流れてるんやぞオ。うかうかダンスさらしに通りやがって見イ。自動車のタイヤがパンクするさかい、要心せエよ。帰りがけ



には、こんなお化けがヒュードロドロと出るさかい、眼エまわすな。いっぺん、頭からガブツと噛んでこましたるか

(16頁, 他吉→米人)

(28) この子を芸者にするつもりか。何ちゅうことをさらしやがんねん

(85頁, 他吉→オトラ)

(29) ——そんなへなちょこな考えでさらしたんか。ええか、この子はな、瘦せても枯れても、ベンゲットの他あやんの孫やぞ。そんなことせいで、立派にやって行けるように、わいが育ててやる。もう、お前みたいな情けない奴に、この子のことは任せて置けん。出て行ってくれ。出て行け！ 暗うなつてからやと夜逃げと間違えられるぜ。明るいうちに荷物もって出て行ってもらおか

(86頁, 他吉→オトラ)

(30) ——阿呆な奴らや。なにを大騒ぎさらしてけつかる

(103頁, 他吉ひとりごと, 周囲の人々)

(30)は独り言であり、さほど強い語気ではないようにも見えるが、(27)(28)(29)はかなり強いニュアンスのものである。(27)はこのセリフの後に他吉は「いきなり相手の横面を往復なぐりつけた。」とある。(28)と(29)はオトラに対して激怒していて、このセリフの前にオトラをいきなりなぐりつけており、このセリフでオトラを追い払っているところである。(28)はサラスとヤガルが併用され、(30)はサラスとテケツカルが併用されており、この併用も罵りの意をより強める働きを担っている。

サラスは以上の4件としたが、動詞に付く助動詞として厳密にみれば、(29)の1件だけでも見える。(29)は動詞「いる」に助動詞サラスがついて、「いさらす」の形になっている。(27)は「ダンスさらしに」となっている。これは、名詞「ダンス」に動詞サラス(「する」の卑語)がついているとも見えるが、サ変動詞「ダンスする」の「する」部分が助動詞サラスに取り替えられたとも見える。(30)の「大騒ぎさらして」も同様で、サ変動詞「大騒ぎする」の「する」部分が助動詞サラスに取り替えられたとも見える。(28)は「何ちゅうことをさらし…」のようにサラスの直前に助詞「を」があるので、このサラスは動詞である。

動詞サラスには「する」の意味があるため、(29)のような、罵りの助動詞として動詞に接続するケースが少ないのかもしれない。

### 3.2.5 テケツカル(2件)

テケツカルが現れたセリフは次の通りである。

(31) 取るもんだけは、きちきち取りくさつて、この子をそんな目に会わしてけつかったのか

(57頁, 他吉→君枝, 君枝の里親)

(32) ——阿呆な奴らや. なにを大騒ぎさらしてけつかる

(103頁, 他吉ひとりごと, 周囲の人々)

これもクサルと同様, 直前の部分から罵る気持ちが含まれている文である. (31)「そんな目に会わして」, (32)「何を大騒ぎさらして」, である. クサルと同様, 罵る気持ちがもともと含まれた文を, より強めるものとしてテケツカルが付加されている可能性がある.

### 3.2.6 テコマス (2件)

テコマスが現れたセリフは次の通りである.

(33) こらッ. ベンゲット道路には六百人という人間の血が流れてるんやぞォ. うかうかダンスさらしに通りやがって見ィ. 自動車のタイヤがパンクするさかい, 要心せエよ. 帰りがけには, こんなお化けがヒュードロドロと出るさかい, 眼エまわすな. いっぺん, 頭からガブツと噛んでこましたろか

(16頁, 他吉→米人)

(34) 向うへ行ったらな, イの一番に南十字星見てこましたろ思てるねん

(203頁, ♪団治→他吉と君枝)

(33)(34)の2例とも, 「てこましたろ」の形である.

テコマシタル=テコマス+タル (<テヤル) +ウである. この「ウ」は, 話し手の意志・決意を表すものである.

テコマスがシテヤルと同意であるから, テコマスにタル (<テヤル) がついたテコマシタルは, 意味的に重複した表現であり, 強調表現かと思われる.

## 4 落語資料との比較

ここでは, 罵りの助動詞のそれぞれについて, 前章で観察した結果 (すなわち 20 世紀前半における大阪方言の反映された小説からのデータ) と, 20 世紀前半の落語資料から得た結果 (村中 2021,2022) を比較しながら, 考察する<sup>4</sup>.

### 4.1 ヨルの比較

ヨルの源流であるオルは, 落語とは異なり, 小説『わが町』には現れなかった. これが落語と小説の違いであるのか, あるいは小説の中でも, 織田作之助の特徴であるのかは, 他の作品を観察してみないとわからないことである.

ヨルについては, 3.1 で見た通り, 落語資料と同様, 罵りの助動詞の中では最も多く出現した. これは, 村中 (2022) でも述べたとおり, 罵りの程度が軽いからであろう. 「ヨルは, 年齢

や身分や人物像に関わらず使える語形である」という村中(2021)の記述は、『わが町』でも矛盾なく当てはまっていた。ヨルのほとんどが第三者待遇であるという点も共通である。

村中(2021)では、ヨルの特徴として、「語り手が使用しうることを」挙げていた。これは落語の構造上から生じる必然性だったのかも知れない。今回扱った小説資料には、「語り手がヨルを使う」「ヨルの叙述的な性質が生かされる」に当てはまるような場面は特にはなかった。

ヨルの待遇の対象には、違いがあった。落語資料には、「体内の水」や「自分の胸」のような無情物があったのである。次の例である。

(35) わい、唄聞くちゅうとな、頭痛治って、胃病の水がげぶつと下がりよる。

(体内の水の例：「電話の散財」の旦那)

(36) 理屈二つ三つぱって言うたら、胸がぐうっとすきよる。

(自分の胸の例：「理屈あんま」の太郎兵衛)

このような無情物を待遇の対象としたヨルは、『わが町』には見られなかった。

『わが町』に見られた、面と向かっては上向き待遇をするような相手を第三者とした場合の、ヨル(7)(11)の例は、落語資料にもわずかに見られた。次の例である。

(37) あ 寝てよる。

(「いびき車」の車引きが客について述べる部分)

この車引きは、上記の部分以外は、客に対して、「やっとりますさかいなあ」「御馳走よばれましてな」のようにデスマス体で話しているが、客が寝た途端、「寝てよる」という表現を用い、その後客が目を覚ますとまた「踏みましてなあ」のようにデスマス体に戻っている。客が寝ていた間のセリフは、車引きが独り言の中で客を第三者として待遇したものである。

#### 4.2 ヤガルの比較

村中(2021)の落語資料では、「息子」「丁稚」「甥」がヤガルを用いており、「若者あるいは軽烈な人物」が使用するという傾向が見られたが、今回の小説資料においてヤガルをほぼ1人で使っていた他吉は若者でも軽烈な人物でもなく、食い違いのあるところである。村中(2022)ではヤガルが「若者あるいは軽烈な男性が使う」ものから誰でも用いるものへと、時代による変化が生じた可能性もある」と述べている。『わが町』の傾向が、時代的な変化を経た後のものであるということも考えられる。

また、『わが町』のヤガルは対者待遇がほとんどであったが、村中(2021)の落語資料では、対者待遇の占める割合はさほど高くなく、29例中の9例が対者待遇であった。ヨルに比べれば、対者待遇が珍しくない、ということは共通している。

### 4.3 クサルの比較

村中（2021）の落語資料では、クサルは重みのある年配男性が多く使っており、ヤガルと相補的であった。『わが町』では、それは当てはまらなかった。ヤガルもクサルも、ほぼ全て他吉が使っていたのである。

『わが町』はクサル5件中3件が対者待遇、村中（2021）では4件中3件が対者待遇である。クサルは比較的、対者待遇が多めであると言ってよいかも知れない。

『わが町』におけるクサルは、ごく親しい身内相手か、もしくは独り言で使われており、ヤガルほど強いニュアンスではないようだった。村中（2021）の落語資料では、クサルが8例あったが、独り言もしくは独り言的なものが多かった。例えば次の通りである。

(38) 向こうに猫めがうまい口してくさるなあ。

（「蛸の手」の蛸の独り言）

(39) 要らんところで義理立てをしてくさる。

（「やいと丁稚」の旦那→丁稚）

共通点として、クサルは話し相手に強く迫るものではなく、身内に向けて、あるいは独り言として、さほど強い勢いではなく使われるものであると言ってよさそうである。その意味では、ヤガルとの相補性は残っていると言ってよい。

### 4.4 サラスの比較

落語資料では、サラスが1例のみ出現した。次の例である。

(40) ええおなごばっかり、抱いて寝さらして。

（圓歌「ひやかし」：客→他の客）

文脈からすると、かなり強い腹立ちの感情を表しているものようであり、それは、『わが町』の例(27)(28)(29)とも共通している。

### 4.5 テケツカルの比較

落語資料では、テケツカルは忌々しさが込められた例もあるが、ごく軽い罵りの例もある。『わが町』の出現数が少なく、比較・考察をするのが難しい。

### 4.6 テコマスの比較

村中（2022）の落語資料では、2例見られた。次に挙げる。

(41) 腹減ってたもんやから、むしゃむしゃと 食てかましたってん。

（圓歌「ひやかし」：客→他の客、遊女）

(42) ヤケドすんならヤケドさしてみたれ。しょんべんで火、消してこましたら。

(初代春團治「いかげや」：こども→いかげ屋)

テカマシタッテンとテコマシタラである。後者は、テコマスにタル (<テヤル) がついた形であり、『わが町』の例(33)(34)と同様であるが、前者にはタルがついていない。つまり落語資料には、テヤルとの重複形ではないものが見られたわけである。しかしいずれにせよ数が少なく、確たる結論は出せない。

## 5 まとめ

織田作之助の長編小説『わが町』のセリフを、大阪方言の資料として用い、罵りの助動詞ヨル、ヤガル、クサル、サラス、テケツカル、テコマスの出現状況を調べ、用例を検討した。それを、ほぼ同時代の落語資料における罵りの助動詞の出現状況と比較し、考察した。

その結果、ヨルはいずれの資料においても、罵りの助動詞の中で最も多く出現した。ほとんどが第三者待遇であった。罵りの程度が軽く、さまざまな話し手にとって使いやすい形であるように思われた。他の罵りの助動詞と異なり、ヨルは、面と向かってはデス・マス体を使うような相手を待遇するケースもあったが、これも罵りの程度が軽いことと繋がるであろう。無情物を待遇の対象としたヨルは『わが町』には現れなかったが、この点については、今後、広く小説資料を検討すべきである。

ヤガルとクサルは、いずれも対者待遇が多いという特徴があった。使い手に関する特徴は、落語資料ではヤガルは「若者あるいは軽劇な人物」、クサルは「重みのある年配男性」という相補性が見られたのであるが、『わが町』ではその傾向は見られなかった。ただし、クサルはヤガルよりもやや弱いニュアンスがあるように思われた。

サラスは、いずれも、強い腹立ちを表しているようであった。他の助動詞(ヤガル・テケツカル)との併用が見られ、それによってより強いニュアンスを表していた。

テケツカルとテコマスは、出現数がごく少なく、結論が出にくい状況であった。

## 6 終わりに

今回は、織田作之助という、いわば大阪を代表するとも言えそうな1人の小説家の、『わが町』という一つの作品に絞って、調べた。次には、青空文庫コーパスなどを用いて、他の多くの近現代小説家の使用状況を調べたいと考えている。

大阪方言における罵りの助動詞については、近代の落語録音文字化資料を用いて調べた(村中 2021, 2022)ほかに、近世について、洒落本を用いたり、幕末期の戯作「穴さがし心の内そと」を用いたりして調べている。近世と近代を通して、大阪の罵りの助動詞を俯瞰的に見ることも、今後の課題である。

## 【注】

<sup>1</sup>長編小説『わが町』の成立はやや複雑である。1943（昭和18）年に書き下ろし単行本として刊行されたが、それ以前に同名の短編小説『わが町』が雑誌『文藝』の1942年11月号に発表されている。長編小説の単行本の「後記」に、この作品を縮小して雑誌『文藝』に掲載、と記述されているとのことで、実は、短編小説よりも長編小説が先に書かれたようである（佐藤秀明の、岩波文庫『わが町・青春の逆説』の解説による）。したがって、『わが町』の中で使われている大阪方言は、1942年以前に織田作之助が発したものであると考えられる。

<sup>2</sup>ヨルとサラスについては、次のセリフの中にも出現したが、セリフの言葉遣いから、話し手が非関西人であると考えられるため、本稿での集計には入れないこととした。

そうものし、俺《うら》らはアメジカ人やヘリピン人や、ドシア人の出来なかつた工事《こうり》を、立派《じっぱ》にやってみせちやるんじゃ。俺《うら》らがマジダへ着いた時、がやがや排斥さらしよつた奴らへ、お主《んし》やらこの工事《こうり》が出来るかど、いっぺん言うて見ちやらな、日本人であらいでよ（13頁、ベンゲットの労働者→労働者仲間、外国人）

<sup>3</sup>村中（2022）のデータは真田・金沢（1991）および矢島（2007）によるものである。真田・金沢（1991）は、8名の落語家（二代目曾呂利新左衛門、二代目桂文枝、三代目桂文団治、三代目桂文三、初代桂枝雀、二代目林家染丸、四代目笑福亭松鶴、桂文雀）による34演目の落語口演の録音文字化資料である。SPレコード録音・発売年は1903（明治36）年から1926（大正15）年にわたる。矢島（2007）は、9名の落語家（三代目桂文団治、初代桂ざこば、四代目笑福亭松鶴、三代目桂米團治、初代桂春團治、初代桂文治郎、初代桂春輔、笑福亭圓歌、五代目笑福亭松鶴）による16演目の落語口演の録音文字化資料である。録音・発売年は1920（大正9）年から1938（昭和13）年にわたる。合わせて15名の演者による50演目の口演資料となる。

<sup>4</sup>村中（2021）で用いた落語資料は、真田・金沢（1991）であり、村中（2022）と違って、矢島（2007）は含まれていない。

## 【参考文献】

青空文庫 <https://www.aozora.gr.jp>

牧村史陽，1979，『大阪ことば事典』講談社。（縮刷再録：1984，『大阪ことば事典』講談社学術文庫。）

村中淑子，2020a，「織田作之助作品にみるデス・マス等の転訛形の位相差について——「わが町」の世界」『表現研究』111: 11-20.

村中淑子，2020b，『関西方言における待遇表現の諸相』和泉書院。

村中淑子，2021，「明治・大正期の大阪落語資料にみる罵りの助動詞について」『現象と秩序』14: 45-63.

村中淑子，2022，「20世紀前半の上方落語にみる待遇の助動詞について」『現象と秩序』17: 31-45.

織田作之助, 2013, 『わが町・青春の逆説』岩波書店 (文庫版) .

真田信治・金沢裕之, 1991, 『二十世紀初頭大阪口語の実態——落語 SP レコードを資料として』 (平成二年度文部省科学研究費補助金一般研究 (B) 課題番号 01450061 「幕末以降の大阪口語変遷の研究」 研究報告書) .

矢島正浩, 2007, 『近代関西言語における条件表現の変遷原理に関する研究』 (平成 17 年度～平成 18 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 研究成果報告書) .





\*\*\*\*\*

【編集後記】

『現象と秩序』第18号をお届けします。今号には、新旧のさまざまな調査に基づいた論文が5本集まりました。本誌らしい品揃えであるといえるでしょう。

第1論文は、「Zoom」利用時によくみられる現象、すなわち「早口で言いたいことをまくし立てる」というような不思議な現象についての研究です。そのようなことがなぜ起きるのか。それはいったいどんな効果を持っているのか。これらの問いにビデオデータの解析を通して答えるものになっています。オチは、コミュニケーション上の必要に対応してのことなのだ、という謎解きになっており、データに基づいた着実な研究であるといえるでしょう。

第2論文は、試着場面研究です。試着室で鏡を通して客と店員がコミュニケーションをしているとき、じつは大量の想像がコミュニケーションに伴っているという主張こそは「試着」というものの豊かさを示すものでしょう。本来なら軽蔑の対象となりそうな「自賛」に類似した活動が、試着においてどのように可能となっているのか、の謎解きも秀逸です。

第3論文と第4論文は、いずれも社会言語学的な「罵り言葉」の研究です。関西における罵り言葉には、言及対象の価値を引き下げる効果以上の質があると感じていましたが、このように実例をもって丁寧に例証されると納得です。用例を探しながら青空文庫の『わが町』を読みましたが、とても人情味があってほっこりしました。本作は映画化もされています。実際にどう発話されているか、興味を持ち、現在取り寄せ中です。

第5論文は、「AIと人間の関わり」に関して示唆的でした。AIは、人間の内部にいる他者として、人間の活動を助ける振りをしながらじつは統制しているのではないか。具体的には、人間の現在の選択肢構造を強く支援することで、選択肢構造の変更可能性を実質的に抑圧しているのではないか。そうすることで、人間が新しい人生を生きる可能性を封じているのではないか、と恐ろしく思われました。ゲーム研究から文化研究への道筋が、この路線の先に描き得るようにも思われます。(Y.K.)

『現象と秩序』編集委員会（2022年度）

編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）

編集委員：樫田美雄（神戸市看護大学）、中塚朋子（就実大学）、加戸友佳子（神戸大学）

編集協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第18号                      2023年 3月31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 樫田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (樫田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN                                      : 2188-9848

ONLINE ISSN                                     : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>